

通常学級に在籍する特別な支援を要する児童への支援の在り方

ー 学級経営における対象児と周りの児童とのかかわりに着目してー

学習開発コース (12220910) 酒 井 宏 彰

通常学級に在籍する特別な支援を要する児童は、人間関係や学習面に困難を抱えている。そのような子ども達が学級において、周りの児童とかかわりながら成長するには、学級担任の働きかけによって対象児と周りの児童をつなぐ支援を学級経営に位置付けて指導することが大切であると考え。また、そのような学級経営・授業づくりにおいては、ユニバーサルデザインの視点を踏まえた取り組みが有効であることにも言及したい。

〔キーワード〕 特別支援教育、学級経営、つなぐ支援、ユニバーサルデザイン

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景

文部科学省は、2012年に「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」を公表した。その結果によると、知的発達に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は、6.5%に及ぶことが分かった。また、児童生徒の受けている支援の状況について、それらの教育的支援が必要な児童生徒に対する支援が浸透しつつあることも分かる。

調査の結果から、「学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒を取り出して支援するだけでなく、それらの児童生徒を含めた学級全体に対する指導をどのように行うのかを考えていく必要がある」と言っている。教育的支援が必要な児童生徒の支援を考えると、充実した「個」への支援を考えていく一方で、それらの子ども達が人間関係や周りの子どもとの学習でつまづいていることから、「学級集団」についても考えていくことが重要である。

井上・窪島(2009)は「学級集団内には様々な能力差や、得意、不得意とすることの違い、性格的特徴の違いが、学級を構成する児童生徒数の分だけあり、決して均質な集団でなかったはずである。そこに、発達障害をもつ児童生徒や、対人的な困難、学習上の困難をもつ児童生徒もこれらの集団の中で共に学び合うことになったのである。」と述べている。学級集団を構成していく様々な個性をもつ児童生徒の中の学習では、一人ひとりが求める教育的ニーズも児童生徒の数だけある。しかし、

現状では、通常学級に在籍している発達障害の可能性のある児童生徒に対しての支援ばかりが取りざたされてきている。その児童生徒に対する個別の支援は充実してきているものの、その児童生徒を取り巻く周りの児童生徒への支援が十分になされていないと考える。

そこで本稿では、学級経営の在り方について着目し、特別な支援が必要な児童生徒への働きかけと、その児童を取り巻く周りの児童生徒への働きかけについて焦点化し、考察していく。

(2) 研究の目的

本研究は、特別な支援を要する児童が在籍する学級の中で、学級担任のその児童への働きかけと、周りの児童への働きかけに着目し、学級経営の在り方について考察することが目的である。

(3) 研究の方法

本研究では、以下のような方法で行う。

はじめに、学級経営における特別な支援が必要な児童への支援と周りの児童への支援の在り方について先行研究を調査する。

次に、ベテラン教員A教諭の学級経営について聞き取り調査を行い、分析及び考察、成果と課題の検討を行う。

それを基に今後の研究の方向性について考察していく。

2 先行研究の検討

(1) 通常学級における周りをつなぐ支援について

井上・窪島(2009)は、「特別支援教育を推進していく上での、通常学級への支援という場合、学級担任への支援は、大きく2つに分けることができ

と思われる。1 つが、加配教員や支援員といった人的配置を伴う支援体制の構築といったハード的な側面である。2 つめは、学級経営や授業づくり、対象児とその保護者への配慮といったソフト的な側面である。」と述べている。人的配置などのハード的な側面からの支援は、財政的な問題も有するため、実現の可能性も含め、支援が不確実である。そのため、ハード的な支援に頼るのではなく、学級経営や授業づくりといったソフト的な支援を中心に支援体制を構築していく必要があると考える。

ソフト的な側面における支援の在り方について井上・窪島(2009)は4つの因子を抽出した。「対象児とまわりをつなぐ支援」「授業・学習への支援」「逸脱行動、トラブル対処への支援」「保護者対応への支援」である。その因子の中の、「対象児とまわりをつなぐ支援」について、対象児の抱えている困難が、その周囲の児童へ理解を求めていくことが難しいと述べている。

村田・松崎(2008)によると、学級経営上、担任が特に苦勞したこととして、52%の学級担任は、「対象児が他の児童にうまくかかわれないこと」を挙げている。逆に、「他の児童が対象児にかかわれないこと」を挙げている学級担任は、9%であったとしている。

このことから、学級担任は、対象児が他の児童に対して積極的に関わっていけるように「つなぐ支援」が求められる。それは、学級経営を行っていく上で、対象児だけではなく学級の中での圧倒的多数の他の児童が相互に関わっていけるようにすることが、「つなぐ支援」でもあるからである。

(2) 学級のユニバーサルデザイン化

村田・松崎(2009)によると、「学級全体への配慮・工夫」(表1)の結果、上位となったものは、「構造化(授業、教室環境)」「視覚的サポート」「見通しを示す」など特別支援学校や特別支援学級で実践しているような方法が挙げられている。この結果から、特別な支援を必要としている児童に対する支援の方法が、学級全体の児童に対しても行われている現状にある。

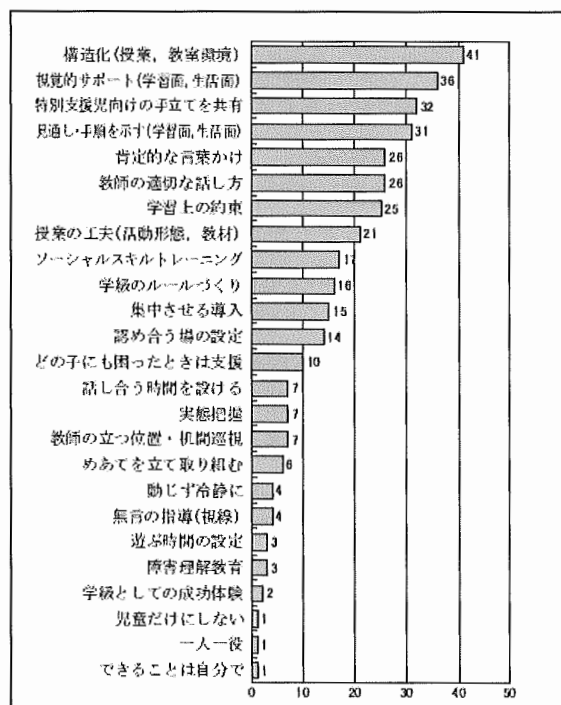
佐藤ら(2004)は、特別支援教育におけるユニバーサルデザインを、「障害の有無にかかわらず行われている授業の工夫・改善等が、全ての児童生徒にとって有益な環境整備であり、結果としてLD等を含む障害のある児童生徒にとっても学校生活

を送るうえで重要な環境整備」と捉えている。

また、「構造化(教室・授業)」「視覚的サポート」は、授業のユニバーサルデザイン化の中で考えられる支援であり、LD等の特別な支援を必要とする児童にとって「ないと困る」支援であり、どの子どもにも「あると便利」な支援である。

この考え方は、授業だけではなく、学級経営そのものにも置き換えて考えることができるのではないかと考えられる。

表1. 学級全体への配慮・工夫の内訳(手だて数)



3 実践と結果(明らかになったこと)

(1) A教諭の学級経営について

山形県内B小学校第3学年におけるベテランA教諭の学級経営の様子について、A教諭からの聞き取り調査を行うとともに、授業観察をしてA教諭の支援の方法について考察していく。

①学級の児童の実態について

B小学校のA教諭の学級(25名)には、広汎性発達障害と診断されている男子児童が1名、アスペルガー症候群と診断されている男子児童が1名在籍しており、また、発達障害の疑いのある児童が数名在籍している学級である。

担任のA教諭は、B小学校に平成24年度に配属になり、持ちあがりの学級ではないため、年度当初の学級づくりにおいて、児童が自分の意見を積極的に発表することが出来ない状態だった。また、

児童同士でのつながりが希薄であったため、児童の関係づくりにとっても苦慮した。

②A 教諭の学級経営理念について

A 教諭の学級経営は、「子ども一人ひとりが大事にされていること」を一番大事にしている。そのためには、子ども一人ひとりに、「話す」「聞く」の態度を徹底させ、発表している人の話を聞き返すことのないように、人の話をしっかり聞くことができるクラスにしようとしている。

以下に、その A 教諭が子ども一人ひとりの話を大事にしている様子が見られた場面を挙げていく。

【場面 1】：国語『わすれられないおくりもの』の授業で学習プリントを解き、意見を発表しようとしている場面における C 児に対しての A 教諭の働きかけの様子である。

A 教諭：じゃあ発表していいですか？

C 児：ちょっと待ってくださあい。早すぎます。

A 教諭：あと何分ほしいですか。

C 児：…6 分くらいほしいです。

A 教諭：じゃあ次の算数遅らせてもいいですか。

C 児：それはだめです。遅らせるのはだめです。
(ここから C 児は落ち着きがなく、パニックになってしまう。A 教諭は C 児について落ち着かせようとしている。そして発表の時間になる。)

A 教諭：では時間になりました。書いたこと発表して

C 児：先生、国語の時間は終わりましたあ。

A 教諭：C 君も聞くよ、あなたの意見も聞いてもらったんだからね。

この場面では、担任の A 教諭が、C 児に対して、自分のことだけではなく、他の児童を意識させることを促している。C 児は、時間に対してこだわりをもっている児童である。授業の時間が予定通りに終わらないとパニックになってしまう。また、急な予定変更が苦手で、落ち着きがなくなってしまう。ここでは、C 児は落ち着いていなかったため、「C 君も聞くよ、あなたの意見も聞いてもらったんだからね。」と促したら、C 児も、他の児童の話を聞いている様子であった。

【場面 2】：算数『長さをはかろう』の授業において、教科書の問題を解いているときの C 児と A 教諭の働きかけの様子である。

C 児：メートルなんてまぎらわしいんだよ！

A 教諭：C 君どうしたの？落ち着いてから問

題解こうね。

C 児：(問題が解けなくて席を立ってうろうろし、泣き始める。そして、床、黒板に鼻水をまき散らす。)

周りの児童：うわっ！汚い！(ザワザワと周りの子たちが騒いでいる。)

A 教諭：C 君にかまいません。みんな C 君いい事してる？

周りの児童：してません。

A 教諭：みんな C 君に優しい知らん振りしてあげようね。

この場面では、担任の A 教諭が、周囲の児童に対して、C 児の良くない行動に注目させないように促している。A 教諭は、普段から C 児の良くない行動に、周囲の児童は注目しないようにさせている。周囲の児童は、C 児とのかかわりにおいて、C 児がよいことをしたら積極的にほめる、良くないことをしたら注目させないようにするように言葉掛けを行っている。

【場面 3】：算数『はしたの数の表し方を考えよう』の授業において筆者(T1)が実習授業を行ったときの D 児に対する A 教諭の働きかけの様子である。

T1：0.5+0.3=0.8 になる理由を説明してくれる人？

D 児：0.5+0.3=0.8 になる理由は…5 と 3 を足して…

数名の児童：ええ！？

D 児：…忘れしました。

A 教諭：ちょっと待って D さん。D さん責任もって最後まで言って。友達が「ええ！？」って言うだけでドキドキしているんですよ。自分の意見を言っていんだよ。

この場面では、筆者が算数の授業を進めていく中で、D 児が自分の考えを説明するときに、周囲の児童から「ええ！？」と言われてしまったために、自分の意見が言えなくなってしまうところである。筆者は、別の児童に指名しようとしていたところ、担任の A 教諭が、D 児に対して自分の考えを最後までみんなに話すように働きかけていた。自分の考えを責任もって話すことは、授業に参加しているという意識を高め、人任せにしないという A 教諭の学級経営の様子が垣間見られた。

4 考察

(1) 周りの児童をつなぐ支援について

A 教諭の実践を観察すると、対象児に対する個別的な支援を重視しているわけではなく、学級の中の周囲の児童とのかかわりを大事にしている姿が見られた。それは、お互いの関係を大事にしながら、対象児と周りの児童をつなぐ支援を学級経営に位置付け、いつも心がけて指導しているからである。

A 教諭からの聞き取りから、子ども一人ひとりに「自分が大事にされている」ことを実感できるように、一人ひとりの違いを認め、子ども同士の信頼関係を確立させていく。担任は一人ひとりの違いを子どもたちが認めていけるように支援していかなければならない。周りの児童と対象児の関係が対等になるような学級経営が必要だと言える。

また、A 教諭の学級では、対象児を通して、周りの児童も成長している様子が窺われた。対象児のC児のマイナスな行動に対して責めることなく、C児を学級全体とのかかわりをもたせることで共に成長していこうとする姿が見られた。

このような学級経営から、C児などの対象児が学級の中で周りの児童とかかわり合うことが必要であると考え。それは、周りの児童へ一人ひとりの子どもたちに違いがあることを認識させていくことになるからである。担任は、対象児と周りとかかわりの中でお互いが成長することができるように学級経営をしていかなければならない。そのような指導が、周りの児童と対象児を「つなぐ支援」と言える。

(2) 学級のユニバーサルデザイン化の視点から

この学級の担任は、「見通しを示した」時間設定、「可視化した」板書、「構造化された」授業づくりなどにより、周りの児童と対象児をつなぐ支援がしやすい環境づくりをしていた。これは、ユニバーサルデザインの視点と共通することが多い。このようなことから、ユニバーサルデザインの視点を学級経営にも活かしていけると考える。

教室環境や授業を構造化していくことで対象児にとって過ごしやすい環境をつくり、また、可視化された視覚的サポートは対象児だけではなく、全ての児童にとって学びやすい環境をつくっている。このように、ユニバーサルデザインの考え方を学級経営に取り入れていくことで、支援の幅を広げていけると考える。

5 到達点と課題

(1) 到達点

特別な支援を必要とする児童にとって個別の支援を重視していくだけではなく、学級の中で対象児と周りの児童をつなぐ支援がお互いの成長に効果的であるということが明確になった。

(2) 課題

A 教諭の学級経営の実態について聞き取りや授業観察を用いて調査をしたが、学級経営の中で大事な要因を検討することについて不十分であったので、今後PAC分析等を用いて調査したい。

また、A 教諭の学級経営の様子を、学級開きから観察し、学級が成長していく様子に着目し追跡研究をしていきたい。

さらに、授業実践においては、特別な支援を要する児童とその周りの児童をつなぐ支援を取り入れていくとともに、ユニバーサルデザインの視点である「構造化」「視覚的サポート」などを踏まえた授業づくりに取り組んでいきたい。

引用・参考文献

- 井上善之・窪島務：「小学校の通常学級担任に対する支援の在り方に関する研究―特別な支援を必要とする児童への指導と学級経営について―」，滋賀大学教育学部紀要，教育科学，No. 59，pp. 23-32，2009
- 文部科学省：「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」，2012
- 村田朱音・松崎博文：「特別支援児が在籍する通常学級における包括的な学級支援(1)―通常学級における現状と課題―」，福島大学総合教育センター紀要，第5号，pp. 55-61，2008
- 村田朱音・松崎博文：「特別支援児が在籍する通常学級における包括的な学級支援(2)―雑誌及びアンケート調査にみる実践例の分析から―」，福島大学総合教育センター紀要，第6号，pp. 25-32
- 内藤哲雄：「学級風土の事例記述的クラスター分析」，信州大学，実験社会心理学研究，第33巻，第2号，pp. 111-121
- 佐藤慎二・平田真姫・四宮和男・谷順子・太田俊己：「通常の学級の授業における軽度発達障害の子どもへの支援―教師の教授行為に着目して―」，千葉大学教育実践研究，第11号，195-205